

諸々の資料を閲覧し考えてみますと、私たちの先人は広々とした原野に、高い志を持ち開拓者としてこの上川の地に赴かれました。それまでは、忠別（旭川）地区は本州に住む人たちからすると受刑者が流される地と考えられていたようです。しかし、北京計画が離宮計画に変わり全国に発令されると、開拓者が怒濤のように入植してきたそうです。だからといって全てがすぐに整っていったのではなく、食べる物すらままならない状況が続いたようです。大正二～四年頃は凶作続きで飢饉にまでなったようです。しかし、皇族が来られるという確信が、高い志と共に旭川を村から町そして市へと大きく発展させていったのでしょ



(明治33年旭川市街地図)

んな中、旭川別院の本堂と大門が建ち上がります。この時代、本州にて神仏分離が発令され廃仏毀釈運動が進むときですが、日本全国で神道と仏教がはっきり違うとわかっていたかということ、そうでもなかったようです。「明治中期から大正後期にかけて」ですから、たとえ内閣で発令されたことであっても、隅々まで浸透していなかったかもしれません。また、たとえ知っていたとしても人の思想に根付いているものは、簡単に払拭されないような気がします。

それゆえに、建設当時、神仏習合の思想そのままに本堂や大門建築に取りかかるとき、また離宮計画に町が盛り上がっているとき、皇族ゆかりを打ち出すということがあったとしても不思議ではなかったのかもしれない。

大門に筋が一本入るだけのことで、今まで屋根の葺き替え等ある中でよくここまで残ってきたと思います。これがあるおかげで、大門こと・旭川の歴史・当時の日本の時代背景・その中で真宗の教えがどのように伝わってきているのか、また私たちの先人が一つのものを作り上げることに對し小さな部位までぬかりなく、意味を見失うことなく妥協せずにごこだわっておられるその姿に頭が下がる思いであります。

次回からは、本堂についてです

平成22年4月1日制作 調査員：草部・垣原・横井よ・高橋

別院しらべ隊

調査報告書No.4 これが別院の大門だ！

旭川別院大門の私的考察

今年、平成22年（2010年）1月より、「本堂等改修」にあたりご門徒の皆様にご本堂・大門・鐘楼堂の状況や存在意義を確認していただきたく、列座にて『別院しらべ隊』を結成し調査してきました。その中でわかってきたことやご門徒の皆様にご理解していただきたいことを報告させていただきます。

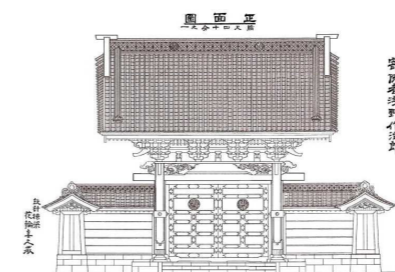
1月には『大門の謎』としまして、大門の創建年数の食い違いのある資料、ご寄付いただいた方（浅野作次郎氏）について報告させていただきました。

2月には『匠の仕事』としまして、棟梁 花輪喜久蔵氏の生い立ちや宮大工の技術のすばらしさ、当初の図面から現在に至るまでの変更箇所を報告させていただきました。

3月には『大門の現状』としまして、棟梁 花輪喜久蔵氏のご苦勞や現在の大門破損箇所、別院施設の道内における規模の大きさを報告させていただきました。



(しらべ隊報告書写真)



(旭川別院大門図面)

ここまできて一つの疑問が生まれました。それは大門の扉の筋の本数です。門や扉は内と外とを分け隔てるもので、外の方に対して「この中はどういう所ですよ」と訴えるもののように思います。

一般の寺院は三本筋で、別院格は四本筋、五本筋なら『皇族に縁のある寺院』ということになります。旭川別院は図面では四本筋なのですが創建時には、五本

筋に変更されているのです。

真宗本廟〔東本願寺（准門跡寺院）〕も、五本筋です。これは「本願寺は、永禄二年（一五五九年）、勅許により「門跡」寺院となる。このことは本願寺の年中行事や荘厳に大きな変化を迫るものであった。「門跡」とは本来、法皇や法親王などの皇族や摂関家などの貴族が入寺する寺院や、その入寺した人物を示す言葉であったが、この時期には最高の寺格を示す称号として、天皇から許されるものとなっていた（真宗の儀式より）」とあるように、寺院の格を表すものとして最高のものを「天皇」からいただいているのです。



(真宗本廟塀写真)

旭川別院は札幌別院旭川支院として始まりました。札幌別院は、同じ花輪喜久蔵氏によって建てられています。塀の筋は図面通り四本筋です。当時の別院の大門を手がけられた花輪喜久蔵氏の技術を受け継ぐ方々は、旭川別院と札幌別院の大門を比較して「旭川別院の大門はこの大門よりさらに部材を太くし、高さも加えてあの豪壮なものに仕上がっている。木鼻にしても、図面ではこの大門と同じ板木鼻で設計したのであったが、唐獅子木鼻に昇格している。花輪翁は、常により以上の仕上がりを望むため、図面で直し、さらに現場でも気に入らなければ何度も手直しさせたという。」といわれることから、建設中に大門が格上げに仕上がることもあり得ることです。



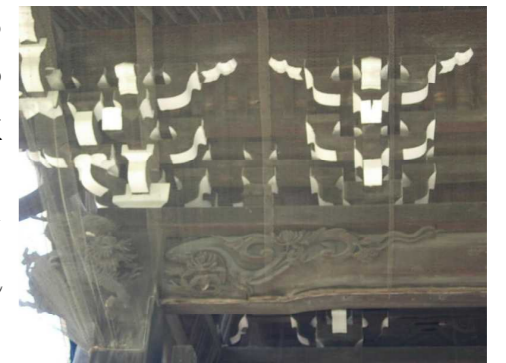
(札幌別院大門塀)



(旭川別院百年史、気仙・匠・年輪)

これは想像ですが、旭川別院の屋根は、札幌別院で「瓦落ち」や「すがもり」等があったため瓦屋根から藁葺き屋根へ変更し、斗組は浅野作次郎氏の寄付額が多かった為なのか、当初の図面より計画されていたようです。そうすると屋根と虹梁の間があいて板木鼻ではあまりに貧弱に見えるので「板木鼻から唐獅子木鼻」へ変更した、あるいは建物の格を表す部位が低いものだと五本筋とバランスがとれないため「荘厳さ豪壮さを表現する」ために、あるいは両方を考えて格上げしたと考えることもできます。

ところが塀の筋は他の変更箇所と違い気軽に換えることが出来ないのではなかろうかと思われま。図面から考えると一本筋が増えるだけで、そのことによって『皇族に縁のある寺院』ということになります。いわゆる門跡寺院です。旭川別院の大門の建立は大正八年ですが、当時の時代背景からすると上下関係・身分関係がはっきりしていた時代に職人さんの心意気に変更されるとは考えにくいような気がします。



(旭川別院大門 木鼻・斗組)

何故このようなことが問題になるかと言いますと、親鸞聖人は著書『顕浄土真実教行証文類』（教行信証）の『顕浄土方便化身土文類六（末）』（化身土巻）の中に涅槃経から引用し『「仏に帰依せん者、終に更ってその余のもろもろの外天神に帰依せざれ」となり。また云わく、「仏に帰依せん者、終に悪趣に墮とせず」といへり。二つには方に帰依す。謂わく、「心、家を出でたる三乗正行の伴に帰するがゆえに。」経（涅槃経）に云わく「永く、また更って、その余のもろもろの外道に帰依せざるなり」と。』と書かれております。いわゆる仏・法・僧に帰依する信心の行者の生活は、時の権力者や外道に帰依する生活をしてはならないという仏陀釈尊の厳しいお言葉を表しておられるからです。



(『顕浄土真実教行証文類』)